

笑顔憑き



黒漆

「無理しないで、ゆっくりと思い出してゆけばいいから。それに、新しい思い出だってこれから一緒に作っていけばいいじゃない」

そう言って彼女は僕に笑顔に向けた。思い返すまでもなく馴染みのある顔、とてもいい笑顔だ。

病室のベッドの上で目覚めてから、既に数日が経つ。どうやら僕は事故を起こしたようだ。なぜそんな曖昧な表現をしなければならないのかというと、正確に憶えていないのだ。単独事故で電柱に突っ込んだのだとか、その衝撃で事故前後の記憶が一時的に失われてしまっているらしい。僕はどうしてそんな行動を起こしたのか、原因はなんだったのか、考えても答えは見つからない。それよりも何より、毎日甲斐甲斐しくこうして通い続け、僕を励まし続けてくれる彼女との思い出を、なぜ忘れてしまったのだろう。

焦る僕に先生は無理に記憶を掘り起こそうとする必要は無いと言ってくれた。必要になれば、自然と記憶が換えるだろうから、今は体の健康を取り戻す事が重要だと。

彼女は幼馴染だった。小学校高校と同じ道を歩み、長い時間を共に過ごしていた。それなのに、大学を出て社会人になってからの記憶がとても曖昧になってしまっていた。けれど、彼女の顔を見ていると、僕はずっと彼女と一緒にあったと、そう思えた。

「ごめんね、こんなにつくしてくれているのに、僕は思い出せない。楽しい記憶だって沢山あったはずだ、思い出せば気の利いたお礼もできる、それなのに」

「いいの、私は蔦君と一緒にいられるだけで幸せだから」

心の底から謝罪する僕に、彼女は目を逸らし、照れくさそうにしてそう小さく答えた。申し訳なく思う一方、これだけ自分を愛してくれる人がいるのだと思うと、こんな不便な状況の中であっても心強くなれた。

平穏な数日が過ぎてゆく、職場での激務、忙しかった日常、あの頃が嘘だったかのような静寂に包まれていた。彼女は気を使ってか病室で僕が心細いと思う、一人の時だけを選んで対面してくれた。昔から少し引っ込み思案なところがあって、とても大人しい子だったなとかつての彼女の姿を思い起こす。小学校の頃は彼女の手を引いて色々な場所へと連れ出したものだ。本が好きで、図書館では読んで気に入った物語の内容を噛み砕き、僕に分かりやすいようにして掻い摘み、教えてくれた。そんな時の彼女の横顔が、僕は大好きだった。僕に本の楽しさを教えてくれたのも、あの安らぎの時間を教えてくれたのも、彼女だった。

ゆりかごの中のような安らぎの中、職場を懐かしく思う頃、唐突に日常が帰ってきた。個室の引き扉から懐かしい顔が病室を覗く。

「久しぶり、その後の調子はどう？」

そんな言葉と共に見舞い品の果物を持ち、同期の同僚、笹木が現れたのは入院してからひと月が経つ頃だった。久しく忘れていた同僚の顔はどこか血色が悪く、何かに怯えるような表情をはりつかせていた。僕は何か遠慮させてしまっているのかと、気軽に返事を返す。

「久しぶり、僕の事は心配無用、元気でやってるよ。今日はありがとう」

賑やかな職場の風景が頭に過ぎる、すると仕事の進捗状況が急に気になりだした。

「それよりも仕事に穴を開けてしまって済まない」

「そんなこと気にしないでいいよ。穴は大きいが取り戻せないほどじゃない。病人はなおすことにだけ集中していればいい。それに悪かった、朝桐。先生の言葉が正しかったんだと痛感したよ。けど、なんで以前と病院を変えた？」

バツが悪そうにそう切り返されても、何の事をさしているのか理解ができない、僕にはその辺りの記憶が抜けていた。笹木に何かされていただろうか。

「そうか、僕は事故以前も病院に通っていたのかな。でも、そんなもの笹木には関係ないだろう、問題があるのは僕の中だけであって笹木にあるわけじゃないんだから」

「いや、私が急かせたからこんなことになったんだ。その様子だと、以前の事故の事も、いや、これはまた余計な事かもしれない」

言いかけておきながら尻窄みに声が小さくなり、やがて押し黙ってしまう。一体何だというのだろう、僕は何か重苦しい空気を感じて、この状況を変えようとそのまま明るいトーンで返した。

「僕は大丈夫さ、何といっても毎日彼女が支えてくれているからな。親族がいなくても、こんな状況で手を差し伸べてくれる人がいる、それだけで幸せ者だろう」

そう言っておどけて笑わせようとする、笹木はなおの事顔を強ばらせた。

「そうか、そうだ、朝桐は幸せなんだね。でも、これで良い訳がない。良い訳がないんだ」

下を向いて拳を握り、小刻みに震える笹木は何故か小さく見えた。なんでここまで心配してくれるんだ、何に対して悩んでいるんだ、という疑問が僕の中で湧いた。僅かな時間、沈黙の中を過ごす、静寂には慣れ始めていたのに、気まずさが部屋の空気を固くし、居づらい物に変えてしまっていた。

すると病室の戸が引かれ、彼女が顔を出し、すぐに扉を閉めて走り去った。何かを勘違いしたのだろうか僕も焦る。それをよそに笹木は突然の事に驚いたのか、啞然と戸を見つめ続けた。

「今、そこにいた」

そんな意味のわからない言葉を囁きながら。

近いうち必ずまた見舞いに来る、そう言い残して笹木が帰ると、僕は再び病室に戻ってきた彼女と話す。そして彼女はただの同僚だと伝えた。そもそも、彼女は笹木のことを知らないのだろうか。何故、同僚の顔を見て踵を返したのだろうか、その疑問を解消したかった。

「知ってるよ、笹木さんでしょう。蔣君と仲がいい同僚だよ」

その表情はどこか寂しげだ。変わらないえみを顔に称えたままでありながら、微妙に変化を続けている。

「私、あの人と顔を合わせるの久しぶりで、それで、ごめんなさい」

「いいんだ、別にせめてないよ」

僕の言葉が届いていないのか、彼女はこちらを向いてはくれなかった。一瞬口元が歪んだ気がした。それは怯えの表情だ、めまぐるしく表情が変わる、強固な意思を思わせるような、けんを含んだ皺が現れ、すぐに取り戻した穏やかさの中に消えていった。何を彼女はこれ程に心配しているのだろうか。

それから緩やかな日々を過ごす内、少しずつ記憶が帰ってきた。頭に張り付いた汚れが少しずつ剥がれて落ちてゆくように、ぼやけていた映像が鮮明さを取り戻してゆく。思い出の中で僕を見つめる彼女、いつだってどんな場所だって、記憶の中には彼女がいた。これ程愛されていて本当に幸せだと思う。彼女と一緒になら、どんな状況でも生きて行けるだろう、僕は心からそう考えていた。

体も正常に戻りつつあり、松葉杖でのリハビリも近づいている。彼女はきっとこの先もずっと、僕を支えてくれるだろう、何を心配しているんだ馬鹿らしい、ベットの中でそんなことを考えていた。それなのに同僚が訪れたあの日以来、頭の中には濃い霧（もや）がかかっているかのよう、落ち着かなさが続いている。

病室の窓、開かれたカーテンの向こうは、雨が降らないまま重く厚い雲が太陽の光を遮っていた。今日は彼女もまだ顔を見せにこない。すっきりしない気持ちで文庫を手にし、数行読み進めては止める、それを繰り返し、ため息をついていると、笹木が再び僕に顔を見せに来てくれた。何か思い詰めているのかその表情は以前見た時よりも更に険しくなっていた。笹木が僕の目前まで足を進めると、病室の中が暗くなり、やがて雨が窓を叩き始めた。

「この間は悪かった、あれから考えていたんだ。どう考えてもこのままじゃ駄目、だから私は話すことにしたよ。動けるようになってからでは遅い、そんな気がするから」

僕はそう言われて身構えてしまう。そんなに重要な事柄を笹木が把握しているのだろうか。けれど、僕を思っている事なのだろう、何より聞いて見なければ何のことなのか分からない。

「いいか、良く聞いて、朝桐。お前さ、恋人なんていなかったよ。何か、しつこく追い回されているとは言っていたけど、だから私は心配してたんだ」

はっきりとした声で、ゆっくりと言葉を繋ぐ笹木。一瞬何を伝えられたのか分からず、僕は言われた事を深呼吸して反芻する。僕に恋人はいなかった、本当に？ そんなはずはない、彼女の記憶は幼少の頃から積み重ねられていて、今でも確りと思い出せる。

「良く思い返すんだ、朝桐は彼女に追い回されて迷惑してた。別れたはずの彼女がいつも朝桐を見張ってたって、そう言っていたじゃないか」

突然脳天を貫かれたような痛みが走る。確かに歳が最近に近づくにつれ、記憶の中の彼女の距離は遠くなっていた。公園の木陰、電柱の裏、自販機の横、そんな目立ちにくい場所から僕を除く眼。そんな馬鹿な、それじゃ事故の後の喪失を利用して彼女は僕の恋人顔をしていたのか？

体から少しずつ血の気が引いてゆくのが感じられた。シーツに目を落とし、再び笹木に目を合わせようと視線を上げると、病室の角にはいつの間に入ったのだろうか、彼女の姿が見えた。気がついていないのか、笹木はさらに言葉を続ける。

「二年前の事故、そして一月前。私はね、ずっと我慢してた。長い間、我慢してたんだ。でもこれ以上は無理」

いや、そんなはずは、なんとか彼女に弁明しなければ、笹木はきっと気が動転しているんだ、様々な回想が緋い交ぜになって、僕はもう何もまともに考えられない。二度の事故だって、なんの事だろう、そんな事あったらどうか。

「二年前は彼女と同じ車に乗って事故を起こしたんだ、憶えてない？ 前の日に私に話してくれたね、全ての決着をつけるんだと、もうまわりつかないでくれとはっきり話すって。それで彼女の運転する車に乗って、彼女の起こした事故に巻き込まれた」

嘘だ、そんなはずは、だってこの一年間、彼女は怪我もなく元気で続けたはずじゃないか。僕のアパートの一室には確かに彼女が居たじゃないか、そう考えている間、部屋端の彼女はずっと左右に揺れ続けていた。

「いい、その時に彼女は亡くなったんだよ。朝桐はどうにか助かったけど、彼女は確かに死んだんだ。でも、朝桐は何を言われたのか知らないけれど、それを認めることができなかった。先生は罪悪感や事故のショックからの健忘症の一種だろうって言っていた。病院で目覚めてから、ずっと彼女の幻覚ばかり見てた。朝桐にしか見えない彼女に尽し尽くされ、健康を取り戻していったけれど、私にはそれが許せなかった。いつまでそんな茶番を続けているんだって一月前、私は朝霧に言ったよね」

不意に、「いつまで死んだ人に捕われているの、それもあなたの事殺そうとした人間に」という声と、「これはあなたの責任でもあるの、私、忘れられたくないって、そう思ってずっと追いかけてた、私のこと忘れないで」と、ハンドルを握りながら必死の表情を浮かべる女の顔が僕の脳裏をかすめた。

「朝桐は次の日、単独事故で電柱に突っ込んだ。それも以前と同じ場所に、私は後悔したよ、そんな事になるなんて思いもしなかった。ただ助けたかっただけなのに、でもこの間わかった。朝桐を苦しめてるのは朝桐じゃない、あの女だったんだって、だから今日こうして全てを話すと決めた」

事故の瞬間がフィードバックする。言われた事を認めきれず、車を走らせる、助手席で笑う彼女、僕は上の空でアクセルを踏み込みこんで、そして。

意志が込められた笹木の眼、それが部屋端、振り返り、彼女へと向けられる。それを向けられ、彼女は床に潰れ、空気が震えているようにばらばらに弾け散って、僕の中に取り込まれた。

すると複雑に絡み合っていた様々が記憶が、再構築されて綺麗に収まりきった。部屋端の彼女は崩れ去り、もう二度と姿を見せることはなかった。

果たして一度目の事故から僕に見えていた彼女は、本当に存在しなかったのだろうか、少なくとも笹木はあの日、戸が開き、その先に彼女の半分だけの顔が覗いたのを見たと言っていた。

こうして全てを思い出しても彼女を追い詰めてしまっていたという罪悪感は消えなかった。出来ることなら全てを忘りたい。けれど、僕は彼女の事を忘れられない、それに僕が生きている間は、決して忘れることはないだろう。

彼女はこんな事を望んでいたのか、あの忘れられない瞬間、時間がゆっくりと流れ、目まぐるしく風景が動く強烈な映像の中、運転席から笑いながら電柱に突っ込んだ彼女の、それまでに眼にした中で一番の笑顔が今でも忘れられない。